

「遊興都市」長崎へ

——江戸時代における中国人の日本旅行に関する研究

一六八四～一八三〇

唐 権

はじめに

- 一 中国人「長崎遊興客」の誕生
- 二 縮められた距離…長崎と江南の交通事情
- 三 清初江南の娯楽業
- 四 中国人の遊女観
- 五 抑圧と歓待…幕府政策の両面
- 六 十九世紀の変化
おわりに

はじめに

近世期における清朝中国と日本の交流は、一六八四年清朝展海令の公布をきっかけとして、「唐人貿易」を中心として大規模に展開

しはじめた。多くの意味で、それは中国の江南地域と長崎との間の交流であった。距離的にもっとも地の利を持ち、且つ日本向け物資を豊富に産する揚子江下流の江蘇省と浙江省がこの時期から唐人貿易の中で断然優勢を占めるようになり、時代が降るにつれて、乾隆時代（一七三六～一七九五）の中期以降、日本貿易に携わる唐船は江、浙商人の独占のもとに運営されるようになった¹⁾。本稿は、それら江南の港から長崎へ渡航した中国人を対象とする。

長崎に関するこれまでの歴史研究で明らかになったように、唐人貿易に内包されている交流が実際三つのレベルで展開していた。一つめは物資の交易である。清朝の商人が生糸、薬種、砂糖など中国の商品を日本へ輸出するかたわら、日本から大量の銅と海産物を輸入していた²⁾。二つめは中国文化の伝播である。中国の出版物（漢籍）が大量に日本へ流入し、また中国の文化人が日本に渡航するこ

とによって、中国文化が日本の儒学、文学、絵画など多くの文化領域に強く影響を与えていた。³⁾そして三つめは人的交流である。海を渡り長崎を訪れる中国人が、貿易取引関係で唐通事、唐人番及び少数の指定商人などと交渉を行う外に、娯楽のため膨大な金を投じ、丸山遊郭の遊女たちとの間に大規模な交流が存在していた。この事実については、本山桂川の『長崎花街篇』、『長崎丸山噺』及び古賀十二郎の『丸山遊女と唐紅毛人』(前編、後編)、『長崎市史 風俗編』など戦前の著書と研究によって知られている。他方、中国人と遊女との交流は日中文化交流史上重要な局面をなしたにもかかわらず、その一端を担っていた中国の渡航者については今までほとんど研究されていない。私は中国人と丸山遊女の交流を手がかりに、近世日中文化交流の特質にアプローチしたい。

中国人と丸山遊女の関係が特筆すべき理由は、まず丸山遊女の特異な地位である。周知のように、元禄二年(二六八九)に幕府が唐人屋敷を設置して以後、長崎渡航の中国人は其中に閉じ込められ幕府の厳重な監視の下に置かれていた。それにより、中国人は一般の日本人との交流を遮断されたが、唯一、丸山遊女との交流のみが持続したのであった。丸山遊女は唐人屋敷に出入するだけでなく、中で宿泊することも許可され、その結果、常に一、〇〇〇名ぐらいの遊女が中国人を遊興相手として活躍していた(ビークの元禄時代に約一、五〇〇人)。長崎には外に日本人とオランダ人もいたが、幕末ま

で中国人が丸山遊女的主要な客層であった。⁴⁾もし人数だけでいえば、彼女たちこそが近世日中交流の担い手といっても過言ではない。

遊女との交流は、中国人が「快楽」を求めるために生じた現象であり、またそれは日中文化交流史上もっとも異彩を放つ一幕である。中国人と遊女が交情する過程のなかで、時に真に深く且つ切な感情が醸し出され、そこから多くの悲喜こもごもの出来事が起き、そして中からやがて蜀山人(大田南畝、一七四九〜一八二三)著「和漢同詠道行」のような人口に膾炙された文学作品も生まれた。⁵⁾

中国人と遊女の物語はまた、単なる性的交渉に止まらず、同時に文化の香りをも漂わせている。遊女たちの多くが胡弓、月琴など中国の楽器をよくし、中国音楽(清楽)に堪能であった。江戸時代丸山遊郭でよく演奏された清楽の数は三〇以上であり、なかには、「看々踊」が京都、大坂、江戸まで伝わり広まって、文化年間にブームとなったことは有名な事実である。⁶⁾一方、長崎に渡航した中国人のなかに、孟涵九のような仮名の書道を好む人、林有官のような小唄が好きな人、ないし陸明斎のような日本的趣味に心酔する人物まで現れてきた。『長崎名勝図会』によると、陸明斎は遊女大町に浄瑠璃を学び、忠臣蔵の一、二句をよく口ずさむ人物で、彼はまた故郷の乍浦で日本風の家を造り、中に畳を敷き、日本の食具酒器を用い、烹調料理の品味すべて日本風を倣ったとある。⁷⁾いうまでもなく、中国人と遊女の間で多様な交流を通じて、その中から新たな文

化が産出されたのであった。

中国人の遊女遊びは、やがて唐人貿易を変容させたのである。本来、貿易の利を求めるために波濤を越え、長崎に渡ってきた中国人は、いつのまにか、商人としての心構えが見えなくなり、その心構えがむしろ別のところで現れるようになった。例えば、文政九年（二八二六）、楊啓堂という唐船主と江戸の役人野田笛浦（秋嶽）が残した筆談が、このことを象徴的に表している。

秋嶽…楊どのにはお馴染みの妓がありますか。

啓堂…引田屋の絲萩です。試みに日本文字で書きましょう。

「いとくき」わたくしは二十一歳で長崎港にまいり、あわせて九回、商いのすべての眼目は長崎におき、故郷に落ち着いておれませんでした。

秋嶽…むかし賈浪仙（賈島）が桑乾水を渡りました時に、「並州は是れ故郷」の句があります。今あなたは九回も長崎に來られたのです。まして萩妓が久しくあなたを待ちこがれております。あなたが崎陽に天翔りたい思いは、故郷に向うそのみではありませんぬな。

啓堂…わたくしは鳥ではありませんぬ。どうして一挙に長崎に参れましょう。

秋嶽…「身に彩鳳の雙飛の翼無けれど、心に豈靈犀の一点通ず

る無からんや」でしょう。

楊啓堂は引田屋の遊女絲萩と相狎れていることを言及し、長崎へ九回も渡る行動を大きく左右したのが、商売利益を求めるよりも、むしろ丸山遊女との交情であると彼は自ら証言している。この興味深い会話は、唐人貿易が中国人にとって、もはや単なる貿易ではなかったことを端的に示している一方、中国人と遊女との交流が、豊富で独自の内容をもつことを暗示している。

これら個々の歴史事実は、古賀、桂川の紹介及びこれまでの長崎史研究によって知られている。それを踏まえて、本論文は、中国の渡航者側に立脚し、中国人と遊女との交流の歴史起源、その展開の実態及び後世への影響を説明しようとする。論文は次のように構成する。まず長崎に渡航する中国人の多様性に着目し、なかに中国人海外観光旅行の先駆的形態の存在を指摘する。そしてこの現象が生じた原因を当時の日中間交通事情と中国国内の社会変動の二つの方向から探る。それから中国人の独特な遊女観及び幕府側の対応を分析し、この交流が持続しうる条件を説明する。さらに中国人の遊女の揚代を手がかりにし、その総額の推移を分析することによって中国人の遊興活動の実態を解明する。最後に同時代東アジアの他の国際貿易都市と比較し、近世長崎の「遊興都市」としての特質を明らかにし、また、近代以後「からゆきさん」の海外進出との関連性を

指摘する。

一 中国人「長崎遊興客」の誕生

一六八四年に清朝展海令の公布が近世日中交流の黄金時代の到来を告げている。それまで台湾と福建省の商人が牛耳った唐人貿易に、江南の商人たちも参加することによって、いっそう繁栄の局面を呈した。大庭脩の統計によると、一六八四年から一七二八年の間の記録にある江南から出航した船は、南京船が三七〇艘、寧波船は二三七艘に達している。中でも一七〇八年がピークで、その年に四五艘の南京船と二三艘の寧波船が長崎に入津した。つまり、平均して五日間ごとに一艘の船が上海或いは寧波（乍浦）から日本へ出航していたのである。もし渡航唐船の総数と渡航者の総人数を見たら、その数はさらに驚くほどである。例えば、元禄元年（二六八八）に長崎に入港した一九三艘の唐船が、九、一二八人の中国人乗客を連れてきたのであった^①。

大規模な貿易は、また活発な人的交流をもたらしていた。商人と商船の乗組員がいうまでもなく主役である。そのほか、医者、僧侶、騎射が巧みな人など幕府の招聘に応じて来崎した人もあれば、時に清朝のスパイもいた。或いは商人のかっこうをして、商売以外の目的で長崎へ渡った人も多くいた。例えば、著者不明の『延宝長崎土産』に、日本人が来航の中国商人を次のように観察している。

長崎は、日本西海のはてにて、東国にては、蝦夷松前と云ふに同じ。異船の出入なくば、塩焼く海士、釣りの翁も住むべき所にあらず。……殊に若唐人などは、長崎の遊女を恋しつつ、商にことよせ、渡海するものあるよし也。異国のならひ、傾城屋に行きてかくれしのびして買事はせず、おのおの小宿ここによびて、月に雪に、酒のみうたひ、舞かなでつつ、なぐさむわざなれば、曲輪の外に女の出ずば、一人も売べき様なし^②。

商売を口実として、実際遊女に恋するため、渡海する若い中国人がいた事実がこの文章から窺える。また、岡島冠山（二六七四〜一七二八）の『唐話纂要』卷之六「徳容行善有報事」には長崎の美しい自然風景に引きつけられ、日本に渡った中国人の物語を記録している。

李徳容ハ揚州ノ人ナリ。乃チ富貴ノ人ノ嫡子ニテ。諸人コレヲ敬ヒケル。素リ長崎ノ山水ノ風景ヲ聞及ビ。一タビ遊ビタク思ヒケル処ニ。我カ国貞享年中ニ。幸ヒ便リアリケル故。荷物ヲ販テ長崎ニ来リ……^③

長崎に来た李徳容は、「毎日稻山大浦等ノ所ニ来往シテ消遣」す

ることに耽って、また「荊棘林」^{アザミ}へも足を運んだ。この物語は恐らく、一六八九年唐人屋敷が成立する以前の話であろう。李徳容と同じく、『海国聞見録』の作者なる陳倫炯も「日本風景佳勝」を聞き、また明代倭寇擾乱の「情実」を究明したいため、庚寅年（一七二〇）の夏に日本を訪問したのである。⁽¹²⁾ いずれにせよ、交易であれ、遊女遊びであれ、物見遊山であれ、中国人の日本渡航の目的は実に様々であった。

そして、一番注目すべきところは、純粋な遊興目的の日本旅行、今日でいう意味での海外観光旅行に近い現象が、その頃すでに唐人貿易の中に生じた点である。長崎渡航者の人員構成は単に商人と乗組員だけでなく、かなりの遊客も中に混じっていた。これについてケンペル（一六五一―一七一六）が興味深い記録を残している。オランダ商館の商館長として勤めた彼は『日本誌』の「日本におけるシナ人の貿易およびシナ人の処遇」の章に、その様子を次のように述べている。

（一六八三と一六八四年）一年間に二〇〇隻のジャンクが次々に長崎に入港し、一隻の乗組員は五〇人を下らず（現在では三〇人を超えることを許さない）、年間にすれば、延べ一万人にのぼるシナ人がやって来る有様だったので、用心深くかつ疑い深い日本人は、ようやく危惧の念を抱くに至った。

ちょっと想像できないことであるが、時には一〇〇人を満載してきたジャンクも数度あった。これらの人々の大部分は船客で、品物を買って儲けようという連中であり、他の者も遊びがてらやってきた連中である。遊びがてらやってくる連中というのは、若い金持ちのシナ人であり、長崎でただ遊ぶというよりは、正しく言えば女遊びをするためにやって来るのである。シナでは金で女を買えるところはどこにもないが、日本では至るところで女郎買いができ、特に長崎の町の遊女は、他の町の女郎よりもずっとよい稼ぎをしている。⁽¹³⁾

ここでケンペルは、膨大な数にのぼった中国人渡航者を大多数の「品物を買って儲けようという連中」と、少数の「遊びがてらやってきた連中」の二類に区別し、後者は単に「女遊び」の目的で日本にきたと観察している。オランダ商館が日本の貿易統制に対応するため、精力的に日中貿易関係の情報を収集したことは、かつて岩井成一・永積洋子両氏が指摘したところである。⁽¹⁴⁾ そうであれば、ケンペルの記述には相当の信憑性があるであろう。つまり、中国人遊客がすでにオランダ人に注目されるほど、かなり日本に来ていたのであった。

実際中国人自身も、それと似ている記録を残している。巖雲という人の文章である。彼は丙戌年（一七〇六）から清朝の官吏として

四年間勤めたが、官職をやめた後、蘇州に一六年間住んでいた。甲辰年（一七二四）に、彼は長崎崇福寺の六代目住持道本（一六六四～一七三二）の詩集「蕭鳴草」に序を書いた。その冒頭に、

姑蘇、江南一大都会也、東抵蒼溟、控閩浙、通群島、而於長崎尤近、貨貝之所聚、艘舶之所至、吾郷之挾貨服買者、多奔走焉、而懷奇好異之士、亦往往借之以供其壯遊之具^⑤。

とある。ここにも長崎へ渡った中国人を「挾貨服買」の商人と「懷奇好異之士」にわけて、後者が往々にして長崎へ「壯遊」すると作者は観察している。この文章の次に、さらに「漫遊海表、馳域外之異觀、寓胸中之高寄」と続き、作者自身の海外へ飛び出そうとする意欲を記している。

周知のように、清朝と日本は正式の外交関係を結んでいないため、両国の間には正式には貿易関係だけが存在した。しかし、日本と中国を繋ぐ貿易船は実際単に商人と貨物を運んだだけではなかった。裕福な若い中国人、或いは「懷奇好異之士」らは貿易船に乗って長崎へ渡航したが、遊びが彼らの本音であった。ある意味で、彼らは中国人海外旅行の先駆者と言えるかもしれない。ただ、一六八九年以後唐人屋敷に閉じ込められた彼らは遊興のエネルギーを丸山遊女との遊びを通してしか放出できなくなってしまったのである。

二 縮められた距離…長崎と江南の交通事情

唐、宋時代には、中国から見れば、日本は絶域の国であり、そこへ行くためにはしばしば死の覚悟をしなければならなかった。しかし、清初の江南に住んでいた中国人は、すでに「姑蘇、江南一大都会也……而於長崎尤近」という感覚をもつようになり、また日本へ旅行する現象もひそかに生じた。この飛躍が可能になった条件は何であろうか。

一つ既知の事実とは、清朝初頭の段階で中国人は中国から長崎までの距離を正確に把握し、日中間航海を短期間で完成することがすでに実現していたということである。享保頃に唐通事と清朝の人・朱来章の問答を記録する『清朝探事』に、

上海乍浦、寧波陀山ヨリ、長崎迄道程実ニハ何程可有ヤ、
航海ノ時、船中ニ、夥長、舵工数年ノ積功ヲ以テ、方向、更数ヲ考ヘ、各処往来スルナリ、更数トハ、唐里六十里、日本路ニシテ、七里有奇ノ道程ナリ、是ハ順風ノ時、一昼夜ヲ行コト、直路六百里ナルヲ以テ、此十分一、六十里ヲ更ト定ム、上海三十二更日本路、二百二十五里、乍浦三十六更日本路、二百六十里、寧波四十二更日本、二百九十六里、普陀山四十更日本、二百八十二里、右ハ無地ノ更数ナリ、十度ニ一度モ、此直路ヲ乗渡スコト

ナシ。¹⁶

とあるように、中国人はこの頃すでに航海の「積功」があつて、距離と航行時間を同時に測れる「更」という計量単位を使って「各処往来」していた。しかも、計算の精度もかなり高いものであつた。

それによると、「直路」で航行する場合、上海或いは乍浦からは三日間ぐらい、寧波或いは普陀山からは四日間ぐらいで長崎へ行けるのである。もちろん、この機会は「十度ニ一度モ」なく、実際の航行は理想のケースよりだいぶ時間がかかったのはいうまでもない。大庭脩の統計に拠ると、江南地域から長崎まで実際の航海日数は、

普陀山 五〜一四日

南京（上海） 六〜二〇日

寧波 八〜一四日

である。¹⁷ それにしても、当時上海から北京まで陸地で四〇日、長崎から江戸まで一ヵ月ぐらいの路程と比較して考えれば、長崎と上海、寧波など江南の港の距離は確かに近いのである。

因みに、その頃に江南から「寧波船」と「南京船」の二種類の船が長崎へ出帆していたのである。前者が竜骨のついている航洋機能の優れた外洋船で、後者が「底平く長き」の河船である。航洋性の弱い南京船は、本来中国国内運輸用の船であるが、長崎までの航海にも十分堪えうるものであつた。『華夷通商考』に長崎の人・西川

如見が、「何方より吹風にも乗安く妨げ無し。日本に来る船、四季共に之れ有り」と南京船の安全性を評価しているのである。¹⁸

ところで、江南の人々には、日本との距離が実際よりさらに短いものであるという記憶があつた。それは疑いなく、明末以来中国の東南沿海地域で跳梁した倭寇の影響であると思われる。「浙海距倭、盈盈一水、片帆乗風、指日可到。是真門庭之寇、操戈礪刃以相待者」とあるように、日本との距離の近さがやや誇張的に強調される場合も見られる。¹⁹ また十七世紀初め頃の西洋人宣教師の観察によると、日本が不気味な存在で、しかも嫌になるほど近いと上海あたりの人々は思っていたようである。『中国キリスト教布教史』にマッテオ・リッチが一六〇八〜一六一一年の上海の様子を、次のように述べている。

シャンハイ〔上海〕市はヒエン〔県〕と呼ばれるものの一つで、ナンキン省〔南直隸〕に属しナンキンの統治をうけている。首都〔ナンキン〕からの距離は一四四ミリアあり、〔北緯〕二九〔三二〕度のところに位置している。北側はコレア〔朝鮮〕と相對し、東にジャパン〔日本〕を望んでいる。シャンハイはジャパンにたいへん近いため、これほど近くなければよいのにと考えられている（船尾から風を受けたときは二四時間足らずでチナからジャパンへの航海、またその逆の航海が可能である）。と

いうのは、ジャパン人の海賊がしばしば姿を現わしてはシャンハイ市や海岸地帯にあるその他の市を悩ましているからで、チナ人が以前からジャパン人を憎んでいるのもこのためである。⁽²⁰⁾

帆船時代に、日本までの航行が二四時間以内に完成できるというリッチの記述は、まさに驚くべきことであろう。しかし調べたところ、帆船で中国から出発して一日の内に長崎に到着する記録が確かに残っている。『唐船進港回棹録』に記録している享保十年（一七二五）五番東京船の風説書に、

一私共船之儀ハ去年十二月二日ニ寧波之内乍浦ニ而仕出シ渡海仕候処海上不順ニ御座候而数度乗戻リ漸当正月十三日唐人数量五拾三人乗組候而重而乍浦致出帆同二十五日普陀山江船ヲ寄せ風待仕当月朔日類船壹艘私共船ともに貳艘同日ニ普陀山出船仕別而順風ニ而罷渡申候日本之地何国江モ船寄不申直ニ今日致入津候……

右之通唐人共申候ニ付書付差上申候以上
巳二月二日

風説定役
唐通事目付
唐通事共⁽²¹⁾

とあるように、この船が紆余曲折を経て「当月朔日」に普陀山から出帆して、その翌日の「巳二月二日」に船主が風説書を提出したのである。マッテオ・リッチ神父の記述はこのケースによって裏付けられるが、より重要なのは、むしろ稀にしかないケースが当時中国人の心象として一般化され、また定着してしまったということである。

旅行に欠かせないもう一つのこととは、渡航の手続きの問題である。いうまでもなく、一八六〇年に英清北京条約が調印されるまで、近代的な意味での海外渡航の自由化は中国に存在しなかった。しかし、近代以前において、海外渡航に対する清朝国家権力の統制は個人にまで及んでいなかったし、また個々人の海外渡航を一々管理するという発想はそもそも清朝の為政者の頭にはなかったのである。国外貿易の場合、清朝の管理機関は個々の渡航者にパスポートをあたえたこともなく、次の証明書を発行するだけであつた。

- ①部照、撫院より発行
- ②司照、布政司より発行
- ③懸照、知県より発行
- ④庁照、海防庁より発行

これらの証明書に船主の名前、貨物の明細及び船客の人数を記している。⁽²²⁾つまり、清朝政府の着目点があくまで船と船の主であつて、

そのほかに対する統制はルーズであった。他方、長崎入港の際に必要な書類は、幕府が前年に船主個人へ与えた信牌のみで、乗客に対する身分確認などもまったくなかった。

事実、唐船の乗客を見ると、人数が比較的に安定している船もあれば、浮動の大きい船もあった。後者の場合、例えば元禄元年（一六八八）十九番船は八年間で三二名から四九名に、元禄四年（一六九一）七十番船は五年間に三三名から六〇名の間に変化するというケースはしばしば見られる⁽²³⁾。同一の船なので、その人数の変化は乗組員以外の乗客の増減であるにちがいない。実際、唐船の乗客に「客長」、或いは「客」という身分の人たちが多くいた。例えば『通航一覽』巻二百二十七に、貞享五年（一六八八）謝芬如を船頭とした百三十六番南京船の人員は、水夫以外の乗客一七名のリストが記録されている。それによると、乗組員に船頭一人、財副一人、夥長一人、船公一人、総官一人、工社二人のほか、客が一〇人もいた⁽²⁴⁾。これら客の身分は判明し難いが、貿易関係者以外の人でも長崎へ渡航できることはここで確認できよう。

いずれにせよ、清朝初頭には、中国から長崎までの距離はかつてないほど近く感じられ、また唐人貿易の枠組みの中に旅行が事実上自由に出来るのである。「客長」や「客」の身分を利用して日本を訪問した中国人が実際多くいたと推測される。「丸山の恋は一万三千里」⁽²⁵⁾、当時の日本人が想像していた遊女と異国人との交情は、あ

くまでもその一面にすぎず、中国人と丸山遊女の関係は、近隣同士のものであった。

三 清初江南の娯楽業

中国人遊客が来日する理由は、先に引用したケンベルの『日本誌』に「シナでは金で女を買えるところはどこにもないが、日本では至るところで女郎買いができ」とされている。この指摘はやや簡略すぎるが、問題の核心をついていると思われる。つまり、中国人が長崎に吸引される原因は、中国の社会事情と社会変動に深く関わっていたのである。

中国は古代から娼妓の発達する国である。ここの「妓」も「娼」も、歌や舞いという技芸をもち、主人や客の枕席にも侍る女性という意味である。高級妓女の中に、歌舞や芝居に長じ、文学の素養を持ち、或いは琴棋書画に優れた女性が多くいた。彼女たちを抱える妓楼は単に売春宿ではなく、多くの文化の発信地と中継地であり、都市娯楽文化の中心的存在であった⁽²⁶⁾。明代中期以後、江南地域において都市文化が爛熟し、妓女もその全盛期を迎えた。明末清初の文人余懷（一六一六―一六九六）がその有名な随筆『板橋雜記』のなかに、明末の南京の旧院（娼家）の様子を次のように述べている。

旧院は貢院（郷試の試験場）との間に河をひと筋隔てて、通

かに向かい合っている恰好である。もともと才子佳人のために設けたものであるから、郷試の行われる年になると、四方からの受験者がことごとく集って来る。四頭立ての馬車を仕立てたり、騎馬を連ねたりして訪れ、器量よしを選んで歌をうたわせる。車子のような美声で歌がうたわれ、陽阿のごとき美妓の舞が演じられる。芝居の囃子と歌が合奏されると、屋形船の浮かぶ河の水は香ぐわしく感じられる。あるいは十日も留連しての歓びを味わい、あるいは二世の契をかわし、葡萄棚のもとで戯れにお金を投げて表が出るか裏が出るかで勝負を争い、芍薬の花壇のあたりでは、閑にあかして玉馬を抛げての賭けごとをするなど、平康(唐代の長安の地名、妓女のすんでいたところ)の全盛時の再現であり、詩文の盛事の一面でもある²⁷⁾。

妓楼は貢院(科挙試験場)の隣に立てられ、そこは歌舞、芝居の演出場であり、賭け事を優雅に行う場であると同時に、秀才たちがそこを風流文人のパフォーマンスを演じる場として、詩文を競い合い、恋愛を求めたのであった。

しかし、明から清への王朝交替の戦争が忽ちこの地域を血なまぐさい戦場と化し、南京、蘇州、揚州など江南の都市が清軍に悉く破壊され、妓館、酒楼など都市娯楽の施設はすべて瓦礫となってしまった。『板橋雜記』にまた、

いまの清の時世となりましてこのかた、時うつり物かわり、十年昔の夢、揚州(隋の都)の繁華のさまも捨てがたいとは申せ、かつての歓楽の巷も草の茂るがまま、紅き拍板(四つ竹、ハンドカスターの類)にあわせての妙な舞や、清らかな歌ごえも、もはや聴こうにも聴けません。また洞房のあやぎぬ、青簾に刺繍した窓掛けなど、見たくても見ることもできません。名花、瑤草(香草)、錦瑟、犀毗も鑑賞しようにも、かなわぬしだいです。ときたまそのあたりを通りすぎると、みわたすかぎり蒿と藜ばかり、楼館も焼け失せ灰となり、美人の姿も塵土に埋もれ、盛者必衰の感慨これにすぎるものがあるでしょうか。鬱々とした気持ちは晴れそうにもありません²⁸⁾。

と戦争後の妓楼の荒れ果てた様子を述べている。かつて栄えてきた妓楼は今や火が消えたような淋しい状態になった。遊楽に耽っていた人たちは、王朝衰亡の悲壮感をもち、もはや妓楼の遺跡に対し慨嘆することしかできなかった。さらに、この打撃につづいて、新しく成立した清朝政府が次々と禁制の命令を出した。その命令の内容は以下の通りである。

順治八年(一六五二)と十六年(一六五九)、二回にわたって出された教坊司女樂の廃止の命令。

順治九年（一六五二）の「禁良為娼」の命令。

康熙十二年（一六七三）に、各府州県で祭祀を行う際の娼婦、伶人使用の禁止命令。

雍正三年（一七二五）、各省の「在官樂工」の廃止命令²⁶。

簡単に言うと、この一連の措置は新王朝が人心を一新させる雰囲気のもとに作ったものであり、その内容の主旨は、政府が自ら妓女と妓楼を直接に管理する旧制度を廃止させ、民間経営の妓楼を厳しい統制の下に置くことであつた。そのほか、清朝の法律『大清律例』には、女性を誘い娼家を経営する人、或いは文武官吏と生員、監生（科挙試験をめざす学生）が妓楼で遊興するのに対して、重い刑罰を設けている²⁷。この一連の措置により、娼家の面貌が余儀なく大きく変化させられた。日本に來た中国人朱來章が享保頃の中国の娼樂事情とその変遷を次のように紹介している。

明朝マテハ、遊女町処タニ有ト云トモ、日本ノ如ク、定リタル場所ニ、曲郭ヲ構ル等ノコトナシ、清朝ニ至テ、遊女禁制也但シ、山西、陝西二省ニハ、樂戸水戸ト云、遊女芝居、狂言ナドヲシ、人ヲ集メ慰ムル宿屋アリ、其外諸省ノ内、遊女処、或ハ商客旅人ノ集ル処、舟湊ニ、茶屋女ノ類ヲ抱ヘテ、置所尤多シ、其宿ニ、旅人等來ルアリ、或ハ旅宿ニ呼寄スルコトモアリ、先代官処ニモ知レタル、遊女ヲ官妓ト云リ、当代ニハ官妓ナシ、

表テ向キ皆隠シ遊女ナリ、曲郭ヲ花街ト云、遊女ヲ倡ト云、俗ニ嫖ト云、カプロヲ（交）婢ト云、クツワヲ亀鴉ト云、又ハ忘八ト云、揚屋ヲ娼房ト云

また、

（遊女町、芝居見物）何レモ昔年ニ比スレハ、粗減セリ、婦女ハ、自分ノ家内ニテ、唱戲ヲ倣シム、外方エ至ル者、マレナリ、閒々五六十歳ノ老婦ハ、行モノアリ、僧ハ戲園ニ尤多シ²⁸。

つまり、清朝の「遊女町」は前代の明と比べて大きく異なり、山西、陝西など少数の例外を除けば、江南を含む多くの地域には「隠シ遊女」しかおらず、しかも「粗減」なものであると、当時の商人たちは実感していた。戦争と清朝の新しい政治は、江南地域の娼樂を確実に没落させたのである。

そして、時代が降り、政府の統制が緩むにつれて、民間経営の妓楼も次第に昔の活気を戻しつつあつた。しかしその復興がかなり遅れていたのである。王書奴『中国娼妓史』によると、一六四五年度の戦争で瓦礫となった南京の歓楽街の復興は、乾隆末年つまり十八世紀の末期まで待たなければならなかつた。また経済中心地の揚州においても、娼家がもとの繁華を戻したのは、同じく百年以上かかっ

たとある。³²⁾

いずれにせよ、唐人貿易の最盛期を迎えた十八世紀前後は、同時に中国江南地域の都市娯楽の不況期でもあった。中国人の遊客が大量に長崎に渡航する背後に、この事実があったことを無視してはいけない。なにしろ、長崎へ行くことは、十七世紀末期から十八世紀にかけての長い間、江南の中国人にとって、清朝の禁制から逃げ、「快楽」を求めるもっとも便利な方法なのである。

四 中国人の遊女観

丸山遊女は特殊な階層として多くの外国人と接触した。そして外国人が書いた日本を紹介する書物に、彼女たちはしばしば登場している。独り中国人のみならず、オランダ人の記述にも遊女がみられるのである。ただ、文化的背景の違いにより両者が描いた丸山遊女像が大いに異なっている。本節はこの二つの遊女像を比較し、遊女が日中文化交流の一端を担いうる根源を探る。

日本の娼妓制度は、古代中国から強く影響されながらも、独自の発展を遂げていた。奈良時代(七一〇〜七八四)に大和朝廷がかつて中国の官妓制度に倣って、官僚や使節を接待するために「采女」制度を設置したことはある。だが、それは日本社会に定着することへはできず、その後天皇権力の低下と共に早くも形骸化した。³³⁾ 実際、近世日本で成長した娼妓制度は、元和三年(一六一七)に発布され

た幕府の命令(元和五ヶ条)によって制度化した集娼制である。「遊女」と呼ばれる女性たちが特定の地域(廓)に集められて、「人心鎮撫」の道具として男性にサービスを提供させられる。廓中での営業は幕府からの保護を受け、それ以外すべての「遊女屋商売」が禁止される。³⁴⁾ 一方、集娼制の下に置かれている遊女たちは単に肉体を売る女性ではなく、歌舞伎や舞踊を演じ、或いは高度な教養を身につけ、文化人女性として活躍した。遊女の活躍で、遊郭は多様な文化が創造された場所として士庶競演の文化センターとなった。³⁵⁾

丸山遊郭は寛永十九年(一六四二)頃に出来たものであると言われている。その中の遊女は奉公する対象によって分類され、中国人と関係する遊女が「唐人行」、オランダ人と関係する遊女が「阿蘭陀行」、日本人と関係する遊女が「日本行」とそれぞれ名づけられていた。「唐人行」と「阿蘭陀行」の遊女は、普通の意味での遊女のほか、家事をする使用人、混血児を哺乳する乳母(いわゆる「乳母遊女」)も含まれていた。³⁶⁾ 遊女はここではむしろ唐人屋敷或いは出島に出入することの出来る特殊な女性を意味している。

オランダ人観察者の中に、遊女屋が遊女に舞踊、唱歌、音曲などの教養を教えることを観察した人がいた。³⁷⁾ しかし、その遊女論の多くは、専ら性的売買の罪惡に着目している。例えば、一七七五〜一七七六年の間に蘭館医として出島に滞在していたCarl Peter Thun-

bergが遊女に関して次のように述べている。

疑ひもなく、宗教と道徳によりて啓発されている基督教徒、此回の不幸なる若き婦女と肉欲的交わりによりて、墮落してはならぬ。しかし、日本人其者は、異教徒であるから、好色を一つの罪惡と考へない。況や法律と政府によりて保護せられてゐる斯くのごとき場所に於てをや。⁽³⁸⁾

或いはメイラン (Germain Felix Meilan 一八二六〜一八三〇年の間に出島の蘭館長を勤めていた) は、日本に対して好意的であつても、自らの価値観とあまりにもかけ離れているので、遊女存在を理解するのに難色を示している。メイランは次のように言う。

(長崎の茶屋が) 公許の遊宴場にして Bacchus (酒の神) と Venus (美と愛、特に色情の神) の神殿とも謂ふべきであらう。一般に一つの美しき趣味を有する事を否定し難き日本人の如き一国民が、如何にして、此点に於て、斯くも思切つて名誉と方正の感じを放擲し得るか、理解し難いのである。⁽³⁹⁾

また、メールデルフォールト (Pompe van Meerdervoort) という人物が、蘭館の医員として一八五七〜一八六二年の間出島に滞在中、

遊女制度の罪惡を批判し、そして日本政府に遊女制度廃止を建言したこともよく知られている。⁽⁴⁰⁾

一方、遊女制度の非道德性をめぐるオランダ人觀察者の議論と対照的に、中国人の遊女論はまったく反対のほうへ展開していた。キリスト教と無縁で、遊女を觀察する中国文人たちの立場はあくまで快樂主義的であつた。

丸山遊郭の遊女に関する中国人最初の記録は、明末清初の儒者黄宗羲 (一六一〇〜一六九五) が著した『日本乞師記』に見える。この文章は、清に滅亡された明朝の復興を図るために、明の遺臣たちが前後数回にわたり日本に来て救援を求めた経緯を記すものである。實際、黄宗羲本人も正保四年 (一六四七) 十月に援兵を請うため長崎に来て、しかし要領を得ずにしてやむなく帰つたといふ。⁽⁴¹⁾ 黄宗羲の来日の翌年 (一六四八)、明の武將黄斌卿の弟なる黄孝卿という人も長崎に渡航し日本の救援を求めた。『日本乞師記』に彼の長崎滞在の経過を叙述してある。

孝卿仮商舶、留長崎、長崎多官妓、皆居大宅、無壁落以綾幔分爲私室、当月夜、每室懸各色瑠璃灯、諸妓各賽琵琶、中国之所未有、孝卿樂之、忌其乞師而来者、見輕於其国、其国発師之意益荒。⁽⁴²⁾

黄孝卿は中国に見られない妓楼の美しさと遊女たちの琵琶演奏を競う姿に魅せられ、享楽に溺れ、日本人に軽視されて、遂にその重大なる使命を全うすることが出来なかった。黄宗羲はここに黄孝卿を非難しているが、遊女とその琵琶演奏の魅力に対し、歌舞技芸をもって客を楽しませる中国の「官妓」と対比しつつ、むしろ賞賛の意を込めているように思われる。

黄宗羲のほかに、遊郭の音楽を語る中国文人もいた。例えば清初の人・沙起雲が詠じた「日本雜詠」に、

花街夜静月明時

处处三弦動所思

拍手門前輕細問

可堪踐我昨宵期^④

という詩がある。この詩は、静かな夜中に、主人公が花街の所々から伝えてきた三弦（三味線）の音から思惑を起し、妓楼に上がる風景を描写している。彼も遊女の音楽演奏からその魅力を感じ得たのである。

長崎事情を詳しく記録した中国人の文章として、「袖海編」が有名であり、中には遊女も登場している。作者の汪鵬は商人であると同時に画家でもあり、また日本に残された中国逸書を再び中国へ伝来することに貢献した文人である^⑤。汪鵬は三回来日したが、「袖海編」は乾隆二十九年（一七六四）に作者の日本滞在の見聞を記録す

るものである。短い文章の中で遊女の様子を次のように描写している。

遊女の住んでいる花街では、長い節で美しく歌い、たおやかに舞う。杜牧の詩に「百宝もて腰帯をよそほひ、真珠もて臂鞆につなぐ、笑う時には花が眼に近づき、舞ひをはれば錦を頭に纏ふ」とあるのは、このことをいうのである。日本の大商人はみんなこれに心を動かされる^⑥。

遊女が歌をうたい、踊りをする時の美しい姿から、作者は唐代の全盛時期の妓女を連想し、また、有名文人の詩を引用しながら遊女の美を称え、いかにも中国文人らしい記述をしている。作者はさらに遊女の魅力述べ連ねている。

遊女にはかしこいものが多い。言葉も、はきはきして、応対に巧みである。化粧も上手で、美しい顔に、みごとな衣裳をつけている。たいまいの櫛をたつとぶ。一つで百両あまりもするのがある。十四、五が妙齡で、お客の前に出る。二十五になると、くるわを出て、かたずくが多い。三十になると、年寄ということになる。シナ人が呼び入れた遊女をタユウ（大夫）という。タユウは品よく客をもてなし、かゆいところに手が届く。

たべものことから、会計に至るまで、まるで一生つきそう者のようにしてくれる。だから遊女はもてはやされるのだ。遊女のなかには、義妓・痴妓・倅妓などと言われるのがある。シナ人のところに来ているときには、まるで夫婦のように、大切にしてくれる。もらいものも沢山にある。いろまちのことを花街という。抱主は、なにになに様のだれ、というように遊女の名をつけている。一軒に数十人抱えているところもあり、十数人抱えているところも有る。そこには、桃や芍薬がえんをきそっているようである。同じうちの相客にはとても親切である。まるで姉妹のように、ものを贈ったり、ゆききしたりする。また、しょっちゅう、下働きの女を屋敷から出して、珍しい花とか果物とか、珍味を買ってこさせて、シナ人を喜ばせる。シナ人のもよいは、ますます深くなり、湯水の如く金を使うようになる。たとえ知者でも、愛欲の海に超然とすることはできない。このかごの中から飛び出せるものはあるまい。⁽⁴⁶⁾

「袖海編」自体は短い文章である。しかし、作者は遊女礼賛の言葉を心ゆくまで贈り、多くの筆墨を費やすのを些かも惜しまなかった。作者の目からみれば、血肉の人間であれば、誰でも溫柔の郷（色町）に征服される。そして遊女に大金を尽くし、たとえ命を失おうとも関係がなく、欲から超然とできぬのは人間本来の宿命である。⁽⁴⁷⁾

いずれにせよ、オランダ人も中国人も、丸山遊女を理解する時に、それぞれの元の文化土壌から離れることはなかった。中国人の遊女イメージは中国の妓女に対する理解の上に築き上げられたものであり、丸山遊女を理想化する傾向すら見られる。或いは、中国人が波濤を越え、長崎へ赴く最大の原動力は、この「遊女幻想」にあるのかもしれない。

五 抑圧と歓待…幕府政策の両面

いままでの近世日中交流史研究で、徳川幕府の対唐人政策を全面的に論述することはなかった。しかし、もし在崎中の唐人たちの活動を貿易と遊楽と二つに分けることができれば、この二つの方向から幕府の対応政策を分析するのも妥当であろう。そうすることによって、十八世紀以後に起きた日中交流の新しい事態が初めて理解できるのである。

一六八五年以後、大勢の唐船が押寄せてくることに対応するため、日本は「貞享令」を始め、一連の行政命令を公布し、貿易規模の収縮、貿易統制の強化を企てようとした。そして、一七一五年の「正徳新令」はこれら一連の措置の最大のものであった。それにより唐船の入港船舶数は年間三〇艘まで減少し、また、来日の清朝商人は幕府に選ばれた商人に限られた。それに、貿易金額は年間銀六千貫とされ、銅の交易は年額三百万斤とされた。⁽⁴⁸⁾

日本の新措置が江南の商人たちに与えた衝撃について、雍正十三年（一七三五）に書かれた『長崎紀聞』（全一卷）にその様子がつぶさに記録されている。作者の董華（二六七五～一七三九）が、雍正七年から九年まで（一七二九～一七三二）の間に蘇州地方の行政長官として、対日貿易の商人たちを管理し、また商人の手から数百万斤の日本銅を買収した経歴があった。『長崎紀聞』は彼の在任中の見聞に基づいて書かれたものである。⁽⁸⁾

『長崎紀聞』によると、「正徳新令」が公布された後、江蘇、浙江両省は一時騒然となった。信牌発行の権力を握った唐通事が大変のさばり、自分の意のままにならないとすぐ商人を叱ったので、商人たちは鼠のように唐通事の前にこせこせとなり、その地位は奴隸同様であった。（原文…康熙五十年後、長崎初給倭照……一時江浙江囂然……島中給照燬照之權俱在通事、於是通事至唐館、距首座指氣使、直呼商名、不可如意輒罵詈而去。商人獲行鼠狀媚詞湧、自同奴隸積威約之漸也）

それだけでなく、さらに深刻なのは、銅の価格が上昇する一方で、商人たちの利益が激減した事態に至ったことであった。以前一回の貿易では二、三千両の利益が得られたが、その後数百両に減り、今は一艘の船が一回の貿易で必ず千両以上の損失を被っている。商人は怯んで航海に行かなくなったが、銅を買収する清朝官吏が後ろで商人たちを厳しく追い詰めているので、商人は隠れたり、逃げたり

した。（原文…従前洋銅、価値每箱九両、商船来回、不過一年、故有獲利二三千金者、其後倭人增価十三兩至十四兩而止、来回或年半、商人慎身節用無意外之險、僅得数百金、多不過千金。今則每箱又増矣……每船必虧折千金以上、此所以畏縮不前也。各省承弁官在蘇僑寓、購商領運、急於星火、於是束縛之、迫脅之、藏匿逃竄。）この事態に対し、清朝官吏の董華は対日貿易の将来に対し悲觀的であり、清朝の銅政が崩壊する日は数年の内には必ず来ると予言している。（原文…不出数年、而銅政大壞、必至之勢也）

董華の見聞は、商人の問い合わせから記録したものであるから、日本の事情について或いは誇張があるかもしれない。しかし、対日貿易は谷の底まで落ちてしまい、商人が日に日に困窮していったのは恐らく事実であろう。ところが、この現実とまったく関係がないように、唐人屋敷の中では商人たちが依然として贅沢に遊樂を行っていた。また、董華の記述は以下のように続く。

女閭七八百名、曰花街。居楼上者、以奉唐商、楼下以待水手。妓至館終年不去、從婢一二人、或三四人、皆鮮衣美食取給於商。商船瀕行、司計者籌其日用並夜合之資、一妓動需五六百金、又索贈一二百金、求商本無過不可得也。商人冒風濤、棄家室、以競錐刀之利。乃日与此輩為伍、言語不通、瘡毒易染、貲財生命委之異域、豈不可惜？

わずかな利益を求める商人たちが資本金だけを保つのはすでに不可能なのに、遊女ひとりに五、六百両を払い、一、二百両の贈り物をしたのである。董華の官吏としての立場から見れば、「瘡毒」感染の危険性を冒し、異国で財産と命を失う商人らは、まったく救いようのない者であった。

しかし、困窮した商人たちがこのように遊興ができる理由について、董華は関心を示していない。この事態の発生の背後に、彼の知られざる事実が潜んでいる。商人たちは日本側の貿易制限政策を董華に伝えたが、幕府政策のもう一つの側面——唐人歓待対策ともいうべき一連の措置——が存在していることを彼に教えなかった。

『丸山遊女と唐紅毛人』の中に、古賀十二郎による幕府の丸山遊女政策、とくに外国人の揚代の規定についての非常に詳細な研究があり、その中から唐人関係の規定を抽出してみれば、少なくとも次の事項に注目すべきである。

まずは唐人揚代の安さである。元禄頃定められた唐人の揚代は、太夫十五匁、みせ十匁、並五匁であった。しかしその後揚代は享保十七年（一七三二）、十九年（一七三四）、元文二年（一七三七）、元文四年（一七三九）と何回も減らされ、中に暴落したこともあったが、ついに寛保二年（一七四二）に定められた揚代は太夫六匁割増なし、みせ三匁八分割増なしとなり、その後幕末まで一定していた。

それに比べて、出島のオランダ人向けの遊女揚代は、一七八二年から幕末までずっと太夫十五匁、店七匁五分の値段であり、唐人の倍以上である。また日本人の場合、幕末の記録によると、丸山の遊女屋が、揚代高によって、二十五匁処、一步処、一十五匁処、十匁処と分類している。因みに、江戸の吉原遊郭の場合、享保期に太夫の揚代は八十二匁、もっとも安い「小さんちゃ」でさえ十五匁が必要であった。^③つまり、中国人が江戸時代を通じて、いつも最優待価格で遊女遊びをしていたのである。

そしてもう一つ、唐人揚代の支払いに対して、寛文十二年（一六七二）に公布された遊女ならびに遊女屋に関する条令「日本人なら当座に揚銭を取り、異国人ならば一ヶ月迄は相対たるべき」とあるように、幕府が驚くほど寛容である。それにしても、中国人たちの揚代支払いは、とかく滞りがちで、未支払いの揚代は高額に上ったのであった。例えば、享保十八年から三年間未支払いの金額は、

享保十八年（一七三三） 宝銀 九七貫二九匁五分四厘

享保十九年（一七三四） 同 一二貫八二匁七分三厘

享保二十年（一七三五） 同 六貫二一匁

であり、合わせて銀二一七貫一三四匁二分七厘に上っている。これらの未払い金を換算すれば、即ち太夫三六、〇〇〇余人、あるいは店五七、〇〇〇余人の揚代に相当する。『長崎紀聞』に記されている困窮した商人たちの贅沢な遊興は、恐らくその大部分は未払いのま

までであろう。そして、これら多くの未支払い金に対し、長崎の奉行所がふつう「放過遣却」し、強制的に中国人に揚代を支払わせることはなかったのである。

この寛大な政策の被害者は、いうまでもなく遊女屋であった。揚代の値上げと滞った揚代銀の支払いを求めるため、彼ら遊女屋が百方奔走し何回も長崎奉行へ嘆願書を差し出した。だがその嘆願はおおむね容赦なく却下された。そして補償策として、遊女屋の困窮難儀に対して唐人行遊女揚代を引当に、長崎会所が時に助成銀或いは給米助成を与えたのである。宝暦三年（一七五三）以後、長崎奉行が唐人の揚代を毎月計算し、おおむね前月分を当月支払うというように改革した。これによって、揚代の支払状況はやっと良好になったが、揚代停滞の問題が幕末まで根絶することはなかった。³²⁾

さらに、唐人が遊女を招く時にも幕府から特権が授けられていた。唐人が一度遊女を招いたならば、その遊女において如何なる事情があろうと、否応なしに、唐人屋敷へ入らなければならなかった。遊女の中には、唐人屋敷に入る事を拒否した者もあったが、その時遊女町の役人は、その遊女に入館を強制した。その上、唐人屋敷の役人、唐通事などまでもが、その遊女を説得したのであった。³³⁾

以上の長崎当局の唐人「歓待」策は、唐人貿易とともに発足したものであり、そして「正徳新令」以後、いっそう強められたのである。貿易統制を強化する幕府の姿勢が前例の見られないほどに極め

て強硬であったにもかかわらず、中国商人たちはこれを受け入れ、平和のうちに幕府の対外貿易改革が成し遂げられたのは、その徹底した歓待政策がもたらした相殺効果であることも否めないであろう。この政策のもとに、丸山遊郭の遊女屋の利益が犠牲になったが、他方多くの中国人は遊業に耽溺し、それに莫大な金を投じたのであった。長崎滞在中の中国人が日用品や遊女揚代などに使ういわゆる遣捨銀は、彼らの売立代銀のおよそ五分の一に当たっていた。³⁴⁾これは幕府の外貨稼ぎに非常に役立ったことはいうまでもない。当初、幕府は唐人屋敷を設置した時、丸山遊郭のすぐ近くにある十善寺村という場所を選んだが、そこからすでに幕府の目的が微かにうかがえるのである。

この政策が成立しうる背後には、江戸時代における「遊女」という社会的存在に対する当時一般日本人の考え方と密接に関係するのである。「遊女牛馬観」という言葉で表されるように、賤民としての遊女は、一般的に人間以下の存在と見なされ、遊女に向かってしばしば「禽獣」、「畜生」という語が使われていた。³⁵⁾ゆえに当時の日本人の意識として、文化先進国の清朝から来た中国人に遊女を提供することは、さほど日本人のメンツが潰されるほどの行為ではなかっただろう。

十八世紀四〇年代以後、貿易の危機が過ぎ、唐人貿易は再び平穏な状態に入った。そして、唐人屋敷の中に、依然として盛況がつづ

いている。六〇年代頃の唐人屋敷の様子を「袖海編」は次のように述べている。

屋敷では宴会がさかんで、それによって、互いに、つきあいを重ねている。上からふるまう宴会、下からよぶ宴会、通事との宴会、福酒をのむ宴会、春の宴会、遊女をもてなす宴会、蔵しらべや蔵出しのすんだ時の宴会、それに、ただの宴会もよく開かれる。珍味が並び、あかりがかがやく。それが毎日のようだ。遊女をもてなす宴会を「撒羹」という。そもそもシナ人が遊女を迎えるのは、どうしても、さかんに宴を開かねばならぬ屋敷の人々やほかの遊女を呼び集めて、もてなし、夜のふけるまで、賑やかにやり、酔わなければ帰らせない。まったく金つかいの荒いことである。長崎にいたものがとかく声色にうつつをぬかすようになるのは、人をまよわす媚によるのであろうか？ それとも宴会の毒にあてられるのであろうか？ はなやかな宴席を一度設けるには、中流家庭の半年分の食費が消しとぶ。笑を買うためにかたむける金は、貧乏役人の数年のふち米にひとしい。酒の代が何千金、かけごとの代は何万金、そうしたことが、ならわしとなって、誰ひとり怪しむものがない。長崎に換心山・落魄橋のあるのも、なるほどと、うなずかれる⁵⁶。

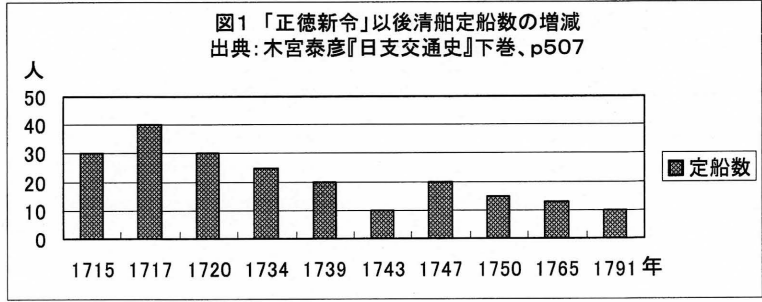
貿易で苦しんでいる商人たちの様子を見た第三者は、しばしば唐人屋敷を「牢獄」に擬えている。しかし他方、そこで閉じ込められている人たちから見れば、唐人屋敷は同時に極楽でもあった。幕府政策の二面性と相俟って、唐人屋敷も二つの側面を有するのである。

六 十九世紀の変化

十八世紀中期以後、清朝政府は新しい銅鋳を採掘するなど、日本銅に対する依存度の減少を努力する傍ら、対日貿易を乍浦一港に限定し、「官弁銅商」と「十二家額商」といった特定の商人に委ねたことによって、貿易統制が強化されるようになった。それ以後幕末に至る間に、政策上において注目される変動はなく、唐人貿易はいよいよ最後の安定時期に入っていた。

他方、銅の不足を告げた日本は銅の輸出を制限しながら、当初三〇艘の清船定船数を時代が降るにつれて減らしていき、寛政三年（二七九一）以後、ついに一〇艘と定めるようになった（図一）。しかしながら乍浦から来航の船舶数は、多くの年に実際に定船数以下であり、渡航者はもちろん、交易商品の数量の減少も著しかった⁵⁷。銅交易中心の唐人貿易が漸次にその重要性を失いつつあったのである。中国人の動きについて、「袖海編」が世に問うて以後、中国人自身の記述は殆どないので、その全体像を把握することは甚だ難しい。この時期に丸山遊女と中国人に関連するもっとも重要な記録は、

図1 「正徳新令」以後清舶定船数の増減
出典：木宮泰彦『日支交通史』下巻、p507



「寄合町諸事書上控帳」である。この史料は古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』のなかに、付録として全文登載されている。⁽³⁸⁾本節ではそれを利用し、十九世紀三〇年代以前約一〇〇年間の唐人屋敷内の消費動向を垣間見ようと思う。「寄合町諸事書上控帳」は、そのタイトルから、長崎寄合町の乙名が長崎会所に提出する文書の写しと推察できる。内容は、寄合町に抱えられている遊女の揚代に関連する事項の記録である。例えば、明和二年の記録は、

明和元年甲申年正月元日より同十二月晦日迄

唐人へ遊女売高 遊女貳千九百五

拾九人 太夫

此代銀拾七貫七百五拾四匁 但六匁替

同 遊女七千六拾五人 見せ

此代銀貳拾六貫八百四拾七匁 但三匁八分替

阿蘭陀人へ遊女売高 遊女千五百四拾七人

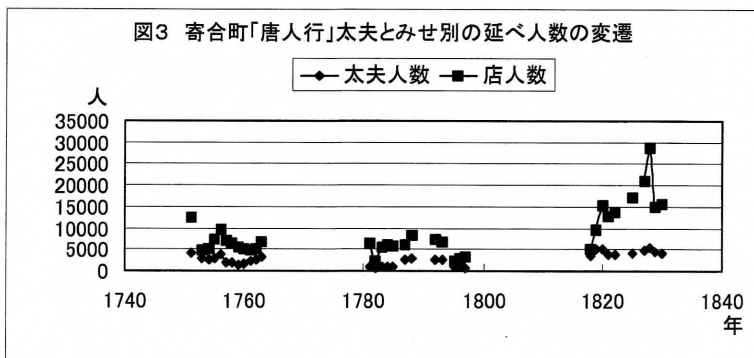
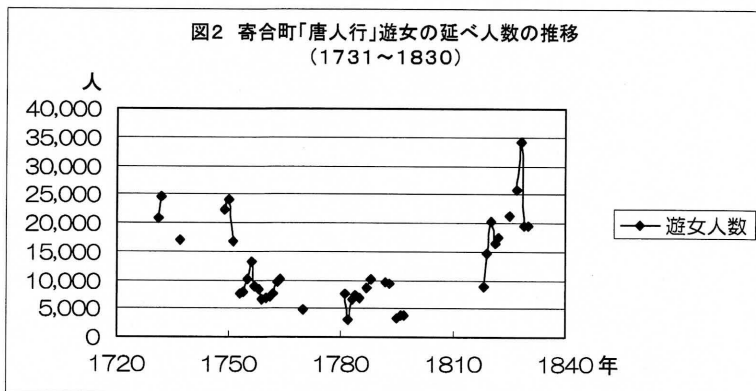
此代銀拾壹貫六百二匁五分 但七匁五分替⁽³⁹⁾

とあるように、一年間の遊女売高、人数などを詳しく書いているのである。そのほか、銀札代請取の期日や、オランダ人個々人の遊興記録（遊女の数と揚代）などのデータも時に見られる。「寄合町諸事書上控帳」は現在、享保十六年（一七三二）から天保元年（一八三〇）まで一〇〇年中、約四〇数年間のデータが残されている。

「寄合町諸事書上控帳」に「唐人行」と「阿蘭陀行」の遊女揚代及び人数が詳しく記録されたのは、当時揚代支払いは独特の方法で行われたためである。中国人の場合、揚代をすべて唐館役人に支払うのであって、遊女町の小役は申出、帳面の引き合い、銀札から正銀と引き替えなど煩瑣な手続きを経てそれを唐館乙名或いは長崎会所から受け取るのである。⁽⁴⁰⁾遊女町側にとって、役所から中国人の揚代を手に入れるために、「寄合町諸事書上控帳」のような詳細かつ正確な文書が不可欠である。

江戸時代の寄合町は、丸山町と合わせて丸山遊郭となり、そこに遊女屋が集まっていた。丸山町には芸者揚屋が多く、遊女屋の数はさほど多くなかった（宝暦の頃に一二軒、天明になるとわずかに四軒）。それに対し、寄合町の遊女屋の数は享保以来いつも二十数軒があり、丸山遊郭の大半を占めていた。ゆえに、「寄合町諸事書上控帳」が断片的な史料だとはいえ、唐人屋敷と出島に出入りした遊女の人数

及び売高の状況を反映していると思われる。
この文書のデータを利用し、次の二つのグラフを作成した。図2は唐人行遊女の延べ人数の変遷を、図3は太夫と店それぞれの延べ人数の推移を表している。この二つのグラフを以って、十八世紀中期以来の中国人の動向を概観する時、少なくとも次の指摘ができる



のである。

まず、唐人屋敷に出入りする遊女の延べ人数は非常に多く、驚くほど大規模な中国人の遊興が具体的数字から読み取れるのである。

図2の遊女の延べ人数は五、〇〇〇人以下の年が五ヵ年だけで、たいてい五、〇〇〇人〜二五、〇〇〇人の間を変動し、中に一〇、〇〇〇人を超えた年も少なくない。これは同時に中国人が毎年膨大な揚代を支払っていることを意味する。中に一番多い年は文政十一年（一八二八）であり、その年に寄合町から唐人屋敷に出入りした遊女の延べ人数は三四、一三九人であり（太夫五、二四六人、みせ二八、七九三人）、揚代の金額は銀一四一貫四八九匁四分に達した。この数字にまだ丸山町の遊女は含まれていないので、実際の数がさらに大きいのはいうまでもない。

それに、十八世紀後半から十九世紀の三〇年代の間、唐人屋敷に出入りする遊女の数が激しく変動したのも指摘できるであろう。大雑把に言う、十八世紀末まで遊女数が減少する趨勢が顕著であり、それはこの時期に来航定船数が三〇艘から一〇艘までに減らされた時期と一致するのである。しかし、もっとも注目すべき変動は、貿易の衰退と裏腹に、十九世紀以後の人数と揚代的大幅な上昇である。図3が示しているように、唐人行の遊女のなかに、太夫の数もかなり増えたが、とりわけ「みせ」クラスの遊女の増長は激しかった。

一七八一年から一七九七年にかけて、太夫の延べ人数が五一七〜二、

五三五人、みせの延べ人数が二、一〇〇八、二一七人の間に変動するのに対し、一八一八年から一八三〇年までの十二年間に、太夫は三、五七三〇五、三四六六人、みせは五、二二六〇二八、七九三人に激増した。中国人の長崎遊興は、一六八四年に展海令が公布された後の三〇年間を第一の全盛期とすれば、十八世紀前期以後の不振期を経て、十九世紀の二〇年代以後に再び高まっていたといえる。

こうした状況が生じた理由について、十九世紀以後来航唐船の大型化による渡航人数の増加も考えられるが、この時期の唐人貿易の質的变化がもっとも関係すると思われる。山脇悌二郎が、『長崎の唐人貿易』のなかで、幕末期の唐人貿易を分析する時、日本の輸出品の買い手が船頭、客唐人のほかには下級船員の台頭が顕著な現象であり、清朝の独占的な官銅貿易体制が実質的に大きく崩れ、幕末の唐人貿易はすでに自由貿易へ指向していたと指摘している^(註)。また、松浦章は、幕末期の唐船乗組員の個人貿易（別段売荷物）に注目し、乗組員各人名義で持渡った貨物が多く、その貿易額は急騰し、金額が銀数百貫に達したことを指摘した^(註)。要するに、幕末期の唐人貿易は、在唐荷主の経営力が弱体化したため、実際、多くの部分が船員（とくに下級船員）によって行われた。従って、貿易利益の相当な部分が船員個人に流入したのである。彼らはその儲けた大金を遊女遊びなど個人消費に投じたと考えられる。

おわりに

以上見てきたように、十七世紀以来中国人と遊女の交流は、日中貿易の副産物というより、中国国内の社会変動がもたらした独立現象ともいえる。明清の王朝鼎革の後、江南地域における娯楽業の衰退と対日貿易の隆盛が同時発生し、それは理想化された遊女イメージと交錯するところ、長崎は中国人の「快楽」を求める地として誕生したのである。他方、幕府側にとって、中国人の遊楽傾向を助長することは、外貨を稼ぎ、また貿易上の厳しい統制と相殺し、唐人貿易を持続させるための有効な手段であり、また幕府の対唐人政策から実際この傾向をはっきり読み取ることができる。こうして、江戸時代の日中交流は単なる商品交易ではなく、多彩な様相を呈したのである。

来航者に女性を提供する貿易都市として、近代以前の東アジア世界において長崎は唯一無二の存在であった（マカオも「墮落」の都市として有名だが、貿易の都市ではなかった）。当時対外貿易の港は、長崎のほかには、釜山と広州があった。朝鮮は釜山を通じて対馬藩と貿易関係を持ち、そこに日本人の居留地（倭館）を設けていた。しかし、朝鮮当局は朝鮮女性と倭館の日本人との間に発生した性的交渉を単に道德の問題だけでなく、重大な政治問題として取り扱っていた。一六九〇年、一七〇八年に朝鮮人女性が倭館に潜り込み、日

本人に売春する「交奸」事件が起きるにあたり、当事者の朝鮮人は全部死刑にされ、また朝鮮側の強い圧力で当事者の日本人男性も対馬藩によって処罰された。一七二一年、朝鮮と対馬藩は条約を結び、朝鮮人女性と関係した日本人男性に対する処罰を法律化した。^{⑤3}一方、中国の広州では、「出島」と同じように西洋の商人たちは商館に閉じ込められていた。彼らの外の世界との接触は、清朝政府の特定商人に限られ、また月に二回（後三回）の郊外散策をするのみであった。外国人女性が商館に入居することが堅く禁じられていたので、それをめぐり、清朝政府とイギリス側の間に何度も齟齬が生じた。

一八三〇年に「盼師案」（イギリス東インド会社の盼師 William Baynes が妻と下女を商館に連れ込んだ事件）が起きた時に、清英双方が武装衝突の寸前まで至った。外国人女性に対する清朝側の上陸禁止令はしばしば野蛮な制度とイギリスに断罪され、その後、イギリスがアヘン戦争を挑発した一つの重要な口実にもなった。^{⑤4}

それにくらべて、長崎の貿易体制は中国の広東システムと同じく中華的自己本位のもとに作られたものであるにもかかわらず、日本は中国人やオランダ人と正面から衝突することは殆どなかった。この違いの背後に、丸山遊女が存在はけつて無視できないのである。また、十九世紀初期から新たに高まっていった中国人の遊業趨勢は、それ以後の歴史にも大きな影響を与えたのであった。幕末期から中国人と丸山遊女の交流の新しい展開は、「からゆきさん」の登

場である。「からゆきさん」とは、明治維新の後、海外へ飛び出し、異国の土地で売春婦として活躍した九州出身を中心とする日本人女性のことである。「からゆきさん」と丸山「唐人行」遊女の関係について、古賀十二郎が次のように述べている。

島原あたりにて、からゆきと云ふ言葉が、今猶ほ行はれてゐる。このからゆきと云ふ言葉は、からゆき即ち唐行と云ふ言葉に転化したもので、もとより唐人に関係する、すなわち唐人行の遊女を指示するものと考察する。それが、年月のたつうちに、特に幕末以降明治の初頭、洋妾と云ふ意味に展化したものと思ふ。からゆきのからは唐人の略称であつたが、西洋人の意味に展化して、斯く洋妾の意味に用ゐらるに至つた者と考へざるを得ないのである。^{⑤5}

つまり、「からゆき」の語源は「唐人行」であり、両者の意味が異なるが、その間に連続性が存在していると古賀はここに主張している。「鎖国」の時代から中国人のことを、「風俗あしく息くさき日本人とあふよりは、中々心やすくてよきよし」と^{⑤6}と思い、また長く中国人と接する経験を持つ丸山の遊女たちは、人種差別の観念が薄かった。明治維新以後、政策上の束縛が一旦なくなった時に、「唐人行」から「からゆき」へと変身し、早々海外へ進出するのは、むしろ

る必然性のあることである。一八六〇年代中期から「からゆきさん」が行く最初の目的地は上海であり、そこで日中交流の新たな局面が繰り広げられていた。その具体的な様子については、次の課題とする。

最後に、遊びを通して、近世の中国人が日本に対し形成したイメージを見てみよう。明代の頃倭寇と対応するため、中国人の日本研究が一時ブームだったことは周知の事実である。しかし、清朝に入ると、唐人屋敷に閉じ込められ、遊女と交情するのみに熱中した中国人は、唐人屋敷の外の日本を積極的に見る姿勢をあまり見せず、彼らにとって、日本はもはや遊郭と遊女のみ存在となってしまう。一八一九年ロンドンで出版されたロシア人ゴロウニンCaptain Golovinの著述英訳本Recollections of Japanの中に、当時の中国人の日本イメージはロシア人の目に次のように映されている。

頼朝が遊女制度を定めたと云う事。自然の結果、前帝国に於ける性格に、一つの十分なる墮落を見るに至った。随って、支那人は、実際日本を支那の青楼と呼ぶのをつねとした。彼等の多数は、特に其淫蕩に参加するために、日本へ渡るのであった。⁽⁷⁾

注

(1) 浦廉一「華夷変態解題」、『華夷変態』東洋文庫、昭和三十三年、一頁。山脇悌二郎『近世日中貿易史の研究』吉川弘文館、一九六〇、三四頁。松浦章「唐船乗組員の個人貿易について」『社会経済史学』第四一卷三号、一九七五、二六頁。

(2) この分野の研究は多くある。代表的な研究として『長崎市史・通交貿易編』、山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』、荒居英次『近世海産物貿易史の研究』、中村質『近世長崎貿易史の研究』などがある。

(3) 大庭脩『中国文化受容の研究』、『江戸時代の日中秘話』、『歴史日中文化交流史叢書1』など一連の研究が代表的である。

(4) 福田忠昭『長崎市史・地誌編 名称旧跡部』清文堂、昭和二十二年、七一九頁。古賀十二郎『丸山遊女と唐紅毛人』長崎文献社、昭和四三年、前編六四二頁。

(5) 遊女と中国人の交流の具体的様相およびそれに関する詩文について、本山桂川『長崎花街篇』春陽堂、昭和二年、八八〜一〇五頁、一三六〜一五一頁。また、注(4) 古賀前掲書、六三五〜七二二頁を参照する。

(6) 清業について注(4) 古賀前掲書、三〇八〜三一二頁を参照する。「看々踊」について本山桂川『長崎丸山嘶』坂本書店、大正一五年、八〇頁、また浅井忠夫『唐人唄と看々踊』(東亜研究会、一九三三)を参照する。

(7) 『長崎名勝図会』長崎史談会、昭和六年、二四三頁。

(8) 野田笛浦「得泰船筆語」、『文政九年遠州漂着徳泰船資料』関西大学出版部、一九八六、五四三頁。

- (9) 大庭脩『浙江と日本——一六八四年より一七二八年にいたる間の寧波船の動向』、藤善真澄編『浙江と日本』関西大学出版部、一九九七、一六〇頁。大庭脩『江戸時代の日中秘話』東方書店、一九八〇、二二四頁。
- (10) 注(6) 本山桂川前掲書四四〇四五頁、注(4) 古賀前掲書前編、四二二頁。
- (11) 注(4) 古賀前掲書、五八五頁。
- (12) 陳倫炯『海国聞見録』「序」、『叢書集成初編』より引用する。
- (13) ケンベル『日本誌』下巻、第四卷『日本におけるシナ人の貿易およびシナ人の処遇』、今井正訳、霞ヶ関出版株式会社、一九七三、一三〇頁。
- (14) 岩井成一「近世日支貿易に関する数量的考察」『史学雑誌』第六二編第一号、昭和二八年。永積洋子『唐船輸出入品数量一覽、一六三七〜一八三三』創文社、昭和六二年、三九六頁。
- (15) 伊藤松『隣交徴書』国書刊行会、一九七五、四三三頁。
- (16) 大庭脩編『享保時代の日中関係史料 二』関西大学出版部、平成七年、一三九頁。
- (17) 注(9)『江戸時代の日中秘話』三九頁。
- (18) 西川如見『華夷通商考』巻一、また『通航一覽』巻二百二十七にも南京船が「河船にして、その製造底平かにかつ長く、難風の患なきにより、四季ともに渡来」するとのべている。南京船と唐船について詳細の研究は大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』、『江戸時代の日中秘話』、松浦章「日清貿易における長崎来航唐船について」(『史泉』四七〜四九号) などがある。

- (19) (明) 王在晋『越鑄』巻二十一、陳東有『走向海洋貿易帯——近代世界市場互動中的中国東南商人行爲』より引用、江西高校出版社、一九九八、一二二頁。
- (20) マッテオ・リッチ『中国キリスト教布教史』、川名公平・矢沢利彦訳、岩波書店、一九八三、一八五頁。
- (21) 「唐船進港回棹録」関西大学東西学術研究所、昭和四九、一〇七頁。任鴻章『近世日本と日中貿易』六興出版、一四二〜一四三頁。
- (22) 中川子信『清俗紀聞』巻の十、大立出版社、一九八二。
- (23) 注(9)『江戸時代の日中秘話』二二五頁。
- (24) 『通航一覽』第六、巻二七、国書刊行会、大正二年、一五頁。
- (25) 注(5)『長崎花街篇』三五二頁。
- (26) 王書奴『中国娼妓史』生活書店、一九三五、一〜二頁。斎藤脩『妓女と中国文人』東方書店、二〇〇〇、一六九〜一七〇頁。
- (27) 余懷『板橋雜記』、岩城秀夫訳、東洋文庫二九、一二〜一三頁。
- (28) 注(27) 前掲書、四頁。
- (29) 万繩楠『中国娼妓漫話』黄山書社、一九九六、一八四頁。
- (30) 『大清律例』巻三十三「刑律・犯姦」天津古籍出版社、一九九三、五五八頁。
- (31) 注(16) 前掲書所収「清朝探事」、一二五〜一二六頁。
- (32) 注(26)『中国娼妓史』二六九〜二七二頁。
- (33) 上村行彰編『日本遊里史』春陽堂、一九二九、四〜五頁、『国史大辞典』「采女」の条。
- (34) 注(33) 前掲書、一二〇頁。金一勉『日本女性哀史』徳間書店、一九八〇、七〜三一頁。

- (35) 西山松之助編『遊女』近藤出版社、一九七九、一二～一三頁。
- (36) 古賀十二郎『長崎市史 風俗編』下巻二～三頁。同『丸山遊女と唐紅毛人』後編、五三頁。
- (37) 注(4) 古賀前掲書、前編七三三～七三四頁、以下オランダ人の遊女観についての引用も同書「紅毛人の丸山遊女観」の一節による、七二六～七六五頁。
- (38) 注(4) 古賀前掲書、前編七四二頁。
- (39) 注(4) 古賀前掲書、前編七四五頁。
- (40) 注(4) 古賀前掲書、前編七五二頁。
- (41) 注(4) 古賀前掲書、前編四七二頁。
- (42) 黄宗義『梨洲遺著彙纂』時中書局、一九一〇。注(4) 古賀前掲書、六三七頁。
- (43) 沙起雲「日本雜詠」、(清)張潮編『昭代叢書』卷二十六より引用する。
- (44) 松浦章「浙江商人汪鵬と日本刻『論語集解義疏』」『関西大学文学論集』一九九五、三八七～四〇一頁。
- (45) 『長崎県史』の「史料編第三」実藤恵秀訳、三一九頁。
- (46) 注(45) 前掲書、三二〇～三二二頁。
- (47) 実藤恵秀の意識と比べて、原文「人非河漢、郷号溫柔、昔人詩云、誰道五糸能統命、却令今日死君家。雖智者恐未能超然欲海、脱此樊籠也」は、中国人の遊女への傾倒ぶりがさらに強調されている。
- (48) 大庭脩『江戸時代の日中秘話』、三二～三三頁。木宮泰彦『日支交通史』、金刺芳流堂、一九二六、四八五～四八七頁。
- (49) 董華『長崎紀聞』についての考証と内容の紹介は松浦章「清代雍正時期官吏の日本観」に拠る。これは松浦章が浙江大学で行われた「清代中日文化交流国際學術研討会」(一九九九年七月三十一日～八月三日)で発表したものである。
- (50) 注(4) 古賀前掲書、二二〇頁、四五〇～四五三頁。
- (51) 注(35) 前掲書、一〇五頁。
- (52) 注(4) 古賀前掲書、前編四五八～四六九頁。
- (53) 注(4) 古賀前掲書、前編六一〇～六一一頁。
- (54) 山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、平成七年、八三頁。
- (55) 三橋修『明治のセクシュアリティ』日本エディタースクール出版部、一九九九、四七～四八頁。
- (56) 注(45) 前掲書、三二〇頁。
- (57) 注(54) 前掲書、二〇六頁。
- (58) 注(4) 古賀前掲書、前編五〇八～五一八頁、後編六八五～七六六頁。
- (59) 注(4) 古賀前掲書、後編七四〇～七四一頁。
- (60) 注(4) 古賀前掲書、前編四五二頁。
- (61) 注(54) 前掲書、二〇九頁。
- (62) 注(1) 松浦論文四三頁。
- (63) ジェイムス・ルイス「釜山倭館における日・朝交流——売春事件に見る権力・文化の相剋」中村實編『鎖国と国際関係』吉川弘文館、平成九年。
- (64) 稲葉岩吉「清代の広東貿易」『東亜經濟研究』第四卷第三号一九二〇。郭衛東「鴉片戦争前後外国婦女進入中国通商口岸問題」『近代史研究』一九九九、第一期。

- (65) 注(4) 古賀前掲書、前編二三二頁。
(66) 注(6) 本山桂川前掲書七七頁。
(67) 注(4) 古賀前掲書、前編六三七頁。